

## カレル・チャペックと『イギリスだより』

飯 島 周

1924年5月末から7月にかけて、チェコの代表的作家であるカレル・チャペック (Karel Čapek 1890—1938)<sup>(1)</sup> は、ロンドン・ペンクラブの招待によってイギリスを訪れた。その旅の成果が、有名な『イギリスだより』(*Anglické Listy* 1924)<sup>(2)</sup> である。この作品は、かれの多くの旅行記中、おそらく最高の傑作であり、当時のイギリスの風物や人物に対する独特の描写は、まことに興味深い。一方、この旅を実現させるのに尽力したのは、かれの友人ボチャドロ (Otakar Vočadlo 1895—1974)<sup>(3)</sup> であった。かれは、当時ロンドン大学のスラブ学研究所で講義するかたわら英米文学を研究していたが、ロンドンペンクラブの国際委員会の一員として、チャペックの招待に努力したばかりでなく、この不案内な旅行者の世話を献身的におこなった。この間の事情と、イギリスにおけるチャペックの言動、特に当時のイギリスの作家たちとの交流を裏面的に紹介しているのが、ボチャドロの遺著『カレル・チャペックのイギリスだより』(*Anglické Listy Karla Čapka* 1975)<sup>(4)</sup> である。この本は、1921年11月10日プラハ発ボチャドロあてのチャペックの手紙を皮切りにして、多くの書簡と写真を中心に、ボチャドロの見聞をありのままに述べて行くという構成で、その序文にもあるように、ボヘミストばかりでなくアングリストにとっても貴重な資料となっている。以下、前記の両書を手がかりに、見て来たような憶測をまじえて、偉大な作家カレル・チャペックのイギリスにおける足跡と、それに関連する事どもを筆のおもむくままにスケッチしてみることにする。

### (1)

チェコの青年作家カレル・チャペックの SF 的戯曲『ロッサム万能

ロボット』(*RUR Rossum's Universal Robots* 1920)と、その兄ヨゼフ (Josef Čapek 1887—1945)との共作夢幻劇『虫の生活から』(*Ze života hmyzu* 1921)は、ポール・セルバー (Paul Selver)<sup>(5)</sup>の英訳によって、オックスフォード大学出版局から出版され、それぞれ、1923年4月および5月、ロンドンのセント・マーチン劇場で初演されることになった。ボチャドロは、これをよい機会と考え、丁度5月1日に開催予定のペンクラブ国際大会にあわせて、ぜひ訪英するようにチャベックにすすめた。しかし、チャベックは、イタリアへの旅行のためにこれを断わった。チャベックは、チェコ文学界の長老アロイス・イラーセク (Alois Jirásek 1851—1930)<sup>(6)</sup>と共に、すでにロンドンペンクラブの名誉会員になっていたが、このクラブの性格や活動について当時はあまり認識がなく、ペンクラブ・ブラハセンターの結成にもそれほど熱心ではなかったらしい。

原作者の挨拶はなかったが、前記両戯曲の上演は大成功をおさめ、イギリスでのチャベックの評判は急上昇した。ボチャドロは、さらに、ペンクラブの発案者であり、実力者であったスコット女史 (Dawson Scott)<sup>(7)</sup>と相談して、チャベックを、ロンドンセンターの名誉ある賓客として招くことにした。女史は、もし必要ならば‘カベック (Kapek) 氏’に旅費をさしあげるという意向さえ示した。この再度の丁重な招待に対し、チャベックは、23年12月25日付のボチャドロあての手紙で、ロンドン行きの意思を明らかにしている。ただし、同年冬か翌年春か夏に、パリのシャンゼリゼの劇場で予定されている『ロボット』の初演に出かけるから、そのついでに足をのばしたいという希望である。理由は、別々では費用がかかりすぎるからだが、ペンクラブの費用負担の御好意は辞退するという意味の文句が含まれている。そして、年を越した24年2月20日付の手紙は、確定的な返事となった。それによると、かれの勤務先である『国民新聞』(*Lidové noviny*)<sup>(8)</sup>の特派員として、当時開催された大英博覧会 (British Empire Exhibition) の取材を兼ねて、6月にロンドンへ行きたい、ただし公式の招待状が欲しい、とある。パリの初演

は4月の予定だが、遅らせてくれるのではないかという希望的観測も記されているこの手紙は、『国民新聞』の名入りの用箋に書かれており、当時のかれの職業生活の一端をしのばせる。<sup>9)</sup> やがて、3月23日付と推察される手紙で、正式招待状の受理と、それへの返答発送が伝えられ、ポチャドロに助言と援助が依頼された。4月21日、かれの母の死の翌週、チャベックは、ポチャドロに次のような具体的な相談をしている。すなわち、

1. どんな服を持って行ったらよいか、フロックのほかにタキシード (smoking) が必要かどうか
2. ベンクラブで用意してくれるホテルには3日ほど滞在して、あとは適当な所に泊りたいが、世話をして貰えるか
3. ショー (George Bernard Shaw 1856—1950)、ウエルズ (Herbert George Wells 1866—1946)、チェスタートン (Gilbert Keith Chesterton 1874—1936) の三人と面識を持ちたいが仲介してくれないか
4. イギリスで見るべき物のすべてと、どれ位の時日が必要か教えて欲しい

の4点である。ポチャドロは、チャベックの意に添うべく努力したが、そのために返事がおくれ、5月5日に、待ちかねたチャベックは催促めいた手紙を送った。それには、オランダ経由でロンドンに行くこと、6月5日頃までの宿の手配を頼むこと、タキシードが必要か、フロックだけでよいかということ、などが記され、返事の手紙を「闇の中の光明」のように待っていますとつけ加えられている。「闇の中の光明」は程なくチャベックの手もとに達したらしく、5月20日付の手紙には、ポチャドロの自宅提供の申し込みに対する感謝と、自分の列車が午後3時前にフォークストーンを出ること、プラハでロマン・ローラン (Romain Rolland 1866—1944) と語りあったこと、などがあり、マテジウス教授 (Vilém Mathesius 1882—1945)<sup>10)</sup> が同行できなくなったことを知らせている。さらに、5月24日には、当月28日21時28分(か55分)にウォータールー駅到着の予定が知らされ、ビクトリア駅かサービトン駅に出む

かえて欲しいとの依頼がなされた。

このような経過をたどって、1924年5月28日午後、「ヨーロッパ大陸の真中にある小さな国」「ロマンチックなボヘミア」からやって来た評判の作家カレル・チャペックは、かれにとって incognito の島国イギリスに第一歩を印したのである。

## (2)

チャペックがイギリスから送った、自筆の挿絵付きの手紙<sup>(11)</sup>は、フェイエトン (fejeton)<sup>(12)</sup>として『国民新聞』に連載され、好評を博した。その最初のたより「第一印象」には、ドーバーの白い崖の絵に添えてこんな記述がある。(以下、引用はすべて拙訳による。)

この白い物はすべて岩で、その上には草が茂っている。まことにがっかりとできていて、いわば「大盤石の上」にある。しかしねえ、両足の下に大陸を踏んでいる方が、やっぱりもっと安心みたいな感じがする。<sup>(13)</sup>

これは、大陸の間人であるチャペックが、島国イギリスに対して持つ不安と頼りなさの表現であるが、この不安は、言葉の問題と結びついて、一層強まっていた。

上陸してたまげたことに、わたしには英語が一言もいえないし理解もできない。そこで一番手近な列車にもぐり込んだ。幸いにも、それはロンドン行きだった。<sup>(14)</sup>

もちろん、チャペックは、英語について十分な読解力を持ち、英米の文学作品を数多く読みこなしていたが、会話の力はあまりなかったようである。これは、『イギリスだより』中の幾つかの記述や、ポチャドロの証言からもうかがわれる。ともあれ、この不安に満ちた旅行者を乗せた

列車は、美しいイギリスの田園をよぎり、まったく同じような家の並ぶ町を通過して、無事にビクトリア駅に到着した。そこで、チャベックは、「機嫌よく」「チェコ人である守護の天使」ボチャドロに迎えられ、鉄道や地下鉄の中を「右へ左へ、上へ下へ」と案内され、やがてロンドン郊外のサービトンにあるボチャドロの寓居に到着し、言葉と食物のもてなしを受け、羽根ぶとんにくるまって、この異国での第一夜の落ち着かぬ夢を結んだ。

以後、上陸時の不安を克服したチャベックは、イングランドの町や田園、公園、博物館、博覧会、大学、クラブ、および寺院などを巡礼し、さらにスコットランド、ヘブリデスのスカイ島、ウェールズを廻って、又ロンドンに戻るという約2ヶ月の長旅を経験することになる。プラハへ書き送られた数々のたよりの中には、「アイルランドについてのたより」のように、実際に行けなかった場所のことを記したものもあるが、ほとんどすべては、自分で体験したことばかりである。かれは、伝聞を嫌うすぐれたジャーナリストとしての行動力、平凡な日常的事件の中に人生の謎と運命の秘密を読み取る哲学者としての眼力、そして、しばしば読者の意表をつく新鮮な辞句を編み出す作家としての筆力を備えていた。『イギリスだより』には、それらが過不足なく発揮されているといえよう。

### (3)

チャベックのイギリスでの生活は、まことに目まぐるしいものであった。それは、後に正式に妻となった女優オルガ (Olga Scheinpflugová 1902—1968)あてにサービトンから出した5月31日付の手紙にもあらわされている。それには、ここへ来てまでも「仕事」をしなければならぬという訴えがあり、連日の殺人的に多忙な日程が記してある。

……朝はイブニング・ニュース紙に寄せる文章を書き、又ペンクラブでの演説原稿を書かなければならない。……午後は何人かの訪問を

受ける。昨日は5時から9時まで、今日は5時から何時までかわからない。明日はロンドンのホテルへ引越し、明後日はゴールズワージー（John Galsworthy 1867—1933）の所へ夕食によばれ、火曜にはペンクラブの昼餐会がある——それにはルーマニアの女王もおいでとのこと——というような調子だ。逃げ出したいよ、きみ。今まで、公園へ一回行っただけだし、それからロンドンへも一度だけ、モーニングを買いに出かけた。ペンクラブの昼餐会のためで、昼餐会にはフロックではいけないからだ。ここのガーデン・シティは美しいが、ロンドンは神経にさわる。あんな所には、きみ、長い時間いられないよ。あんまり人が集まりすぎているから、気分が悪くなる。……<sup>(15)</sup>

そのほか、銀行へ小切手の現金化に行ったり、シャツを買ったり、クラブの何人かの委員たちの作品を「知っているような顔をする」ために、2日間で5冊もの厚い本を読んでおかなければならない、などと記したあとで、「ぼくの滞在のこの公式な部分さえなくなったらなあ」と嘆じ、「あわれなカレル」と署名している。この、いささか甘えさえ感じさせる手紙が如実に示すように、オルガとの手紙のやりとりは、イギリス滞在中のチャベックにとって大きな関心事であった。それは、たまたまオルガとの連絡が絶えた時のチャベックの様子などから容易に推察できた。ポチャドロは、そのような点にまで心をくばって、この友人の世話をしなければならなかった。作家のよき友となるも又つらきことである。

#### (4)

チャベックを主賓とするペンクラブの歓迎行事は、会長のゴールズワージーが司会して、6月3日午後1時半からストランドのレストランガッチ（Gatti's）で開かれた。本来晩餐会の予定だったのが、同じく主賓となったルーマニアペンクラブの名誉総裁で、イギリス国王のいとこであるルーマニア女王マリエの都合で、急に昼餐会に切りかえられたのである。王室関係者も多数出席し、百五十人もの大宴会になったという。

当日のチャベックは、翌日の『デイリー・クロニクル』紙によると、「はにかみ屋らしい若者で、髪が黒く、丸い黒い目をし、冴えた顔色で……魅力的な微笑を浮かべていた」<sup>(16)</sup>。かれは、ルーマニア女王とチェスタートンの間に座らされた。ペンクラブにはあまり顔を出さなかったという、このあこがれの作家と並びながら、チャベックは、あまり言葉をかわすことができなかった。(チェスタートンについての印象と肖像画は、後述するように『イギリスだより』の一部に組み込まれている。) 社会主義者のウエルズとショーは、王室関係者との同席を好まぬ立場からか、顔を見せなかった。(この二人は、当日の欠席の代償として、それぞれ別の日にチャベックを招待した。)

ゴールズワージーの挨拶と紹介にこたえて、チャベックは——ポチャドロによれば——「その大役をみごとに果たした」、つまり、英語の演説をやったのけた。もちろん、その草稿は、到着以来ポチャドロが手伝って作りあげたものである。二人は相談しあって文章をまとめ、ポチャドロが発音を正し、この日に備えて来た。「はじめてのイギリスで、見ないものに取り囲まれながら、それでも不思議に親しみを感じるの、ゴールズワージーやチェスタートンなどの諸作品に親しんだおかげである」というような内容の言葉に続いて、かれはペンクラブの主目的に言及して演説を結んだ。すなわち、「創作家は、宗教的又は社会的に世界を救う力は持っていないだろうが、諸国民の間の相互理解を促進する権利と使命を持っており、それが、世界におけるその最大の任務である」。嵐のような拍手が続いた。ポチャドロは、その演説草稿のコピーを手にして、こっそりと照合していたが、隣にいた目ざとい『タイムズ』の婦人記者に「文字通りひったくられた」。その結果は、翌日『タイムズ』紙に大きな記事となってあらわれ、「あわれなカレル」は、又新たな招待攻めを受ける身となった。チャベック自身も、この演説の出来を自慢する手紙をオルガに送っている。ポチャドロの評価は、もちろん低くはない。発音も、いくらかスコットランド風ではあるが、イギリス生活わずか数日とは思われないほどであったという。

(5)

ポチャドロの指摘する如く、チャベックの『イギリスだより』の基調は、すでに述べた『イブニング・ニュース』紙への寄稿の中に示されている。6月2日付で「狂乱のロンドン」(Maddening London) という題の記事となったその原稿は、チェコ語と英語がまじりあった、雅俗混交的な風刺性に富む文体である。<sup>(17)</sup> この文体は、かれの作品によく見られるが、とりわけ『イギリスだより』には特徴的と思われる。又この記事中の、「人、人、人ばかりしか見えなかった……まさに恐ろしい人間過剰だ」「イギリスで一番よい物は樹木である」という対照的なふたつの文は、チャベックのイギリスについての基本的印象であり、『イギリスだより』には、このような趣旨が何回も述べられている。

たとえば、通りの向うへ渡れないほど凄じい、ロンドンの町中の交通量について述べた後、かれは次のような感想をもちます。

それからわたしは、ロンドンの町から、打ちのめされ、絶望し、心身ともにくたくたになって帰って来た。生まれて初めて、わたしは現代文明に対して盲目的な激しい嫌悪を感じた。この恐ろしい人の集積には、何か野蛮で破局的なものがあるような気がする。ここには七百萬もの人間がいるという。……<sup>(18)</sup>

そして、ウェンブリーの博覧会については、こんな風書いている。

ウェンブリーの博覧会で一番多いものをすぐにいわねばならぬとしたら、それは人間にきまっている。それと修学旅行だ。……道を切り開くために機関銃を手に持てたらなあ、瞬間的に念じたことを告白する。……<sup>(19)</sup>

この博覧会で、かれは「博物館にある恐竜よりもはるかに幻想的で優



雅な」機械類の美に感心する。多すぎる人間への敵意とは裏腹に、「機械こそまさに神々のようだ」と考え、すばらしき完成品である機関車のかたわらに、盲目で皮膚病やみの乞食を並べてみたらと想像する。かれがSF 的作品を好んで書き、文明の過度の発達による人類の滅亡とその再生の可能性を、しばしば主題として用いているのは周知の事実であるが、この何気ない一節にも、かれの態度の一端が感じられる。

しかし、チャベックは、けっして人間嫌いではない。ギリシャの神と見まがうロンドンのボブ（警官）に感服し、ハイド・パークの演説者と聴衆を熱心に観察し、言葉のよく通ぜぬバスの運転手との心の交流を楽しむことができた。その一方、イースト・エンドのスラム街の広大なひろがり悲嘆し、大英帝国治下にあつて白人に奉仕する四億の有色人に同情する。かれを社会主義者と見ることは困難であるが、庶民に共感し弱者に同情する人道主義者と規定することは、それほど誤りではないであろう。偽善者、物知り顔の自信家、権力や名声を笠に着るような連中には強い反発を感じ、皮肉という手法でそれを示している。たとえば、大のプロテスタント嫌い<sup>(20)</sup> のかれは、イギリス各地の大聖堂でおこなわれる長々しい礼拝に我慢できず、16世紀の宗教改革による教会内の簡素化、すなわち殺風景さを「豚のように汚い仕事をやってのけた」と酷評し、さらに、それらの教会に巢食う番人たちを告発する。

プロテスタントの教会番たちは、カトリックの番人たちよりもきびしく、そしてイタリアの番人たちと同じようにチップに御執心だ。ただ——ジェントルマンだから——おもらいももっと多いにちがいない。……（教会の）塔のまわりにいるカラスどもは、たぶん、生きている間教会に取りついていた番人たちの亡霊だろう。<sup>(21)</sup>

あるいは、ゴールズワージーに招かれて食事を共にし、名誉会員にもして貰った由緒あるアセナムクラブ（The Athenaeum）に初めて行った時の様子が好例である。

二番目に案内されたクラブは、名声高く、創立百年で、限りなくおごそかである。そこでは、ディケンズ (Charles Dickens 1812—70) やハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820—1903) その他大勢がくつろいだものだ。その人たちの名前を、そこの給仕頭か執事様か、又は守衛さん (か誰か) が全部教えてくれた。たぶん、その人たちの作品も全部読んでいるのだろう。というのは、とても上品で威厳があるように見えたから。記録保管所のお役人がよくそんな風をしているものだ。<sup>(22)</sup>

多くの人と会い、楽しさも不快さも、希望も絶望も体験したチャベックの心に、強い印象を与えたのは、美しいイギリスの自然、特に老木であった。「イギリスの公園」という題の二番目のたよりには、老木と芝生が、思いがけない視角から論じられている。かれは、イギリスにおけるほとんどすべての物に、クラブにも、文学にも、家庭にも、「何百年もたった、おごそかな、恐ろしくがっちりした木と葉」のイメージを見た。「限りなくまじめで、がっちりとしておごそか」でありながら、突然思いがけぬグロテスクな冗談をばらばらと飛ばし、又「古い皮椅子のように」まじめな顔に戻るイギリス人たちも、「たぶん古い木でできているのだろう」とチャベックは考える。そして、「このしかつめらしいイギリス」が、「あらゆる国の中で、最もおとぎばなし的でロマンチックに見える」のは、老木か、さもなければ芝生のせいだと推測する。特に、きれいな芝生の上を勝手に歩き廻れることに、かれは無上の自由を感じ、そのことが人の性格と世界観に及ぼす影響に思いを馳せた。たしかに、豊かにかつ静かに広がる青々としたイギリスの芝生は、外国人の目にも新鮮で心地よいものである。数百年かかって作りあげたこの財産は、今や完全に精神的価値を持っている。その上を自由に走る楽しさは、大英帝国はなやかなりし五十年前も、落日斜陽の現在も、変わりはあるまい。

芝生に限らず、イギリスの田園は美しい。チャベックは、その美しさを次の文に凝縮している。

イギリスの田舎は、労働するためのものではない。目の保養のためにあるのだ。<sup>(23)</sup>

かれは、サリーやエセックスの草深い小道を歩み、湖水地方では、エリジウムに遊ぶ牛の群を観察し、賢き半神のフウイナム (Houyhnhnm) たちに挨拶をする。都塵にまみれた心は、その度に洗いきよめられたことであろう。

## (6)

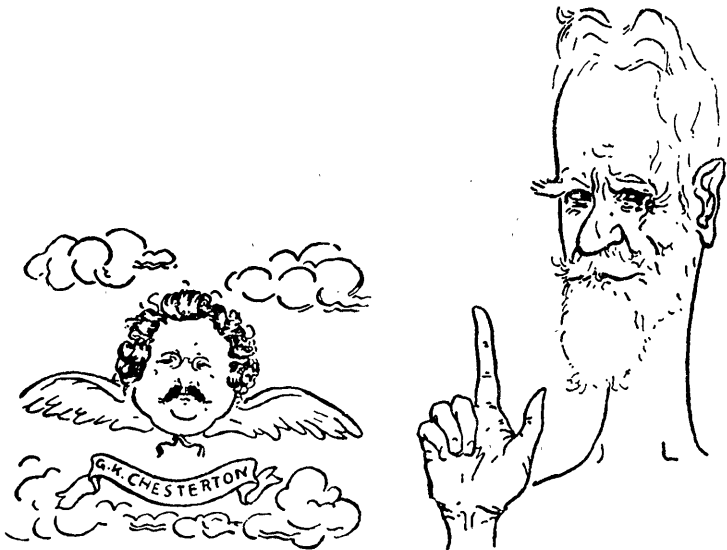
チャベックは、当然のことながら、イギリスで、当時の有名な作家たちと数多く接した。その中で、ゴールズワージー、チェスタートン、ウエルズ、ショーの四人の印象記は、それぞれチャベック自筆の肖像スケッチつきで『イギリスだより』に収められている。

ゴールズワージーは、チャベックによると、「とても静かでやさしく、非のうちどころのない人で、坊様かお奉行のような顔をして」いた。ペンクラブの会長としても、この作家は誠実に職務を果たしたらしい。

前述の如く、チャベックは、残る三人、すなわちチェスタートン、ウエルズ、ショーのそれぞれと会うことを訪英の大きな楽しみにしていた。この三人を対象としたことは、チャベックにとってまことに適切な選択であり、同時に不運な組み合わせでもあった。すなわち、かれの作風には上記三者と通ずるものが多分にあるという意味で適切であり、カトリック作家のチェスタートンが、社会主義者である他の二人の論敵で、ことごとく対立していたという意味で不運だったのである。

どのような風の吹き廻しか、チェスタートンは、チャベックにあまり好意を持たなかったらしい。チャベックの方は、この作家が特に好きで、ブラウン神父物に比較し得るような作品を数多く書いている。そして、その『ノッティングヒルのナポレオン』を愛好するあまり、わざわざノッティングヒルのチェコ系未亡人の家に世話になった位である。しかしか

れの滞英中、チェスタートンは前述の昼餐会で一度隣りあっただけで、遂に招待されなかった。その理由はもちろんはっきりしない。ただ、チャベックによる記事と肖像画が、チェスタートンには気に入らなかったのではないかという推察が可能である。たとえば『イギリスだより』中の文には、チェスタートンを評して「子供、巨人、縮れ毛の小羊、そして野牛が、みんな一緒になっている」とあり、『デイリーヘラルド』紙へのアンケートの中では、イギリス人のおどろくほど細長いタイプの例としてショーを、おどろくほど太ったタイプの例としてチェスタートンをあげている。<sup>(24)</sup> さらに、1925年1月15日付チャベックあての手紙の中で、チェスタートンが、チャベック作の風刺的な自分の肖像画を、まるで「巨大な紙屑かごの中に眠っている河馬」<sup>(25)</sup> みたいに見える、と述べていることも参考になろう。チェスタートンが、自分の巨大な肉体に一種の潜在的な劣等感を持っており、それがチャベックによって刺激されたと考



えるのほうがち過ぎだらうか。ブラウン神父の愛嬌ある肉体的条件も、その作者の複雑な心理と結びつくような気さえする。ともかく、チャベックの思いがチェスタートンに通じなかったことはたしかである。

ウエルズとの最初の出会いは、まったく思いがけなく生じた。ポチャドロの手引きで、6月2日にウエルズから招待を受けたが先約のためそれは実現せず、6月10日偶然訪れた女流作家レベッカ・ウエスト(Rebecca West 1892— )の家で、チャベックは『宇宙戦争』の作者と初めて顔をあわせた。この「美しく頭のよいインテリ女性」は、女権拡張論者であると共に、「ウエルズの親しい女友達」でもあった。この偶然に対する驚きを、チャベックはこんな風に話したという。

「考えてもみろよ、ぼくがベルをならすと、ドアをあけにやって来たのはウエルズなんだ——なんと上衣も着ないでね！」<sup>(26)</sup>

言葉のハンディキャップはあったが、ウエスト家での夕食は楽しいものだったらしく、その夜ウエルズは、ポチャドロあてにエセックスのイーストン・グリーブにある自宅への招待状を送った。この招待も、スコット女史との先約のためふいになったが、6月21日土曜日からの週末に、ふたりはようやくエセックスに体を運ぶことができた。ウエルズ宅には、ミルン(Alan Alexander Milne 1882—1956)ほか数人の客が同席したが、チャベックは、ここでひとつの失敗を発見した。ポチャドロの警告にもかかわらず、タキシードを持って行かなかったのである。「田舎へ行くのに？ ウエルズの所へ行くのに？ 社会主義者の所へ？」と、かれは心から不思議がったようだ。しかし、この失敗は、他の客に夕食時正装しないよう頼んだ賢明なウエルズ夫人キャスリンによって救われた。これもイギリス的な挿話のひとつであろう。ウエルズ家をモデルとする、イギリスの家庭をほめあげた『イギリスだより』の一節には、イーストン・グリーブのウエルズの家には郭公と兎を添えたスケッチがあり、こんな説明がついている。

……そして中ではこの世でもっとも分別に富むひとりの人物が生活を送り、物を書き、外では郭公が三十回ほど続けざまに叫んでいる。これで、イギリスで一番よい物についてのおはなしを終えよう。<sup>(27)</sup>

チャペック自身の語るウェルズ観は、次のようである。

……一方は人前にいる場合の格好だが、二度目の家はでくつろいでいる様子だ……百姓のようにも労働者のようにも父親のようにも、世界中のありとあらゆるものに見える……偉大な作家と対談しているのを忘れてしまうが、それは考え深い万能の人と話しているからだ。<sup>(28)</sup>

両者の親交は、チャペックの帰国後も続いているが、ウェルズ側の資料には、それがあまりあらわれていないのは残念である。

「これは超自然的と言ってもよい人物、バーナード・ショー氏だ……」で始まる白髪、白髭のショーの描写は、『イギリスだより』中の人物評の白眉であろう。チャペックは、ゴールズワージーにアセニウムへ招待された際ショーに会っていた。さらに6月5日付の招待状によって、チャペックは、ポチャドロと一緒にショーの自宅を訪れた。六十八歳のショーは、その半分の年齢のチャペックが気に入ったらしい。ロボットの作者で虫の風刺劇の共作者はきっと「恐ろしい生物」だろうと想像していたと冗談を言い、チャペックにイギリスの印象をたずねて、「何もかも何となく知っているような気がする」という答えを得ると、すかさず「あんたはシェークスピアだったのかも知れないね」とからかう、といった調子である。チャペック自身の観察を、さらに追ってみよう。

……しょっちゅう動き廻りしゃべり続けるものだから、これ以上よくは描けなかった。

おそろしく背が高く、細くてまっすぐで、半分は神様のように、半分は意地の悪いサチュロスのように見えるが、このサチュロスは、何

千年もの昇華作用で、自然すぎるものをすべて失っている。白い髪、白いあご髭と非常に血色のよい肌、人間と思えぬほど澄んだ目、頑丈でけんかっ早そうな鼻で、何かドン・キホーテの騎士的なところ、伝道的なところ、この世のすべてを、自分さえも含めて、からかって楽しむようなところがある。生まれてからこの方、こんな珍しい生物を見たことがなかった。本当のことをいうと、こわかった。これは何かの妖怪で、ただ有名なバーナード・ショーに化けているのだと思った位だ……この人の話を聞くのは、よろこび半分、こわさ半分である。<sup>(29)</sup>

社会主義と菜食主義の提唱者であった『人と超人』の作者は、その後活躍し続け、1938年チャベックが世を去った時、『デイリー・エクスプレス』紙のインタビューに応じて次のように語った。

そんな馬鹿な。こんどはぼくの番のはずだった。カレルは、そんな風に逝ってしまうにはまだまだ若すぎた。少なくともあと四十年は生きて、世界にそれだけのものを与えるべきだった。かれの芝居を見れば、多作で恐るべき劇作家だったことがわかる。<sup>(30)</sup>

## (7)

ここで、『イギリスだより』の英語への翻訳について少し触れておく。前述のように、他の多くの作品と同じく訳者はセルバーであるが、この翻訳は原作者には気に入らず、しばしば訳者の不誠実さと誤訳を責めている。しかし、自身でもある程度経験したボチャドロが認める如く、チャベックのゆたかな表現力のために、その作品の翻訳も至難のわざであった。指摘によればセルバーは、しばしば意味を取りちがえ、面倒な箇所は省略している。そして、何回もの抗議にもかかわらず、改訂に応じようとしなかった。(もっとも、これには出版社の事情もあったのかも知れない。) 筆者が少しあたってみただけでも、問題の部分はかなりあるよう

である。たとえば、最初のたよりにおいても、すでに三行分ほどの省略があるし、「湖水地方」の中では、原文の地名ダーウエント・ウォーター (Derwent Water) が、なぜかウィンダミア湖 (Lake Windermere) に変わっている。ボチャドロは、多くの例をあげているが、特に傑作なのは、「スコットランドへの旅」中の一編「極北の地」の冒頭部である。los (鹿の一種) と losos (鮭) とをまちがえたために、「野鹿の糞」とあるべき所が「野鮭の糞」という面妖な句になってしまった。そのほか、敬愛するチェスタートンと一度しか会えなかったことを残念がって「もうそれ以上会わなかった」と書いたのが、英訳では「そんなに多くは会わなかった」と化けてしまったことなど、不本意な点が多すぎたらしい。ここでも traduttore は traditore たることが誤りなく証明される。同じく裏切りの道に迷い込んだ者として、至難のわざに取り組んだセルバーには同情を禁じ得ないが、それにしても、仁義に反する行為があったとすれば、当然責任は問われるべきであろう。

## (8)

カレル・チャペックは、まごうことなきチェコの作家であった。かれの作品に流れるユーモアやウィット、幻想性、哲学的思索、全人類の普遍性は、それ自体チェコ文学の主要な底流といえよう。その意味では、チャペックはすぐれて国民的な作家であり、それが国際的評価を得る有力な理由となっている。1935年には、ウエルズにより国際ペンクラブ連盟の会長になるよう望まれたが、謙虚なかれは固辞し、かわってジュール・ロマン (Jules Romains 1885—1972) がその席についた。さらに、ルイ・アラゴン (Louis Aragon 1897— ) は、チャペックをノーベル賞候補にしようと提案し、ロマンもそれを支持したという。チャペックの早逝のためそれが実現しなかったのは、まことに惜しむべきである。

そのチャペックは、イギリスにあって常にも故国を忘れなかった。美しいイギリスの田園を見ればチェコの農民を想像し、オックスフォードの特権的な大学生に接すれば自国の貧しい学生の姿を心に浮かべる。ア



セニウムで、ディケンズかスペンサーが座ったことがあるという皮の安楽椅子に身を沈めた時には、こんな感想を述べている。

そうだ、もしわが国にこんな古い皮椅子があったら、伝統をも持てるだろう。どんな歴史的継続性が生ずるか想像したまえ。もし、ゲッツがザークレイスの座っていた椅子に、シュラーメクがシュミロフスキーのあとに、そして、ラードル教授が、たとえば故ハッタラのあとに座るようなことがあったとしたら。わが国の伝統の下には、こんなに古い、又とりわけこんなに座り心地のよい安楽椅子が置かれてはいない。座るべき物がないから、伝統は宙に浮いているのだ。<sup>(31)</sup>

この一節は、軽いユーモアに包まれているが、何世紀もの間強力なゲルマン民族の支配下にあった弱小民族の悲痛な歴史を訴えて止まない。「宙に浮いた」チェコ文化の伝統を守るべく努力して来たチャベックは、忍び寄りナチスの黒い影にひどく敏感で、内外にその危機を警告し、国際的な世論の力で祖国を救おうとした。しかし、今はそれをくわしく論ずるゆとりがない。その努力もむなしく失意の中に逝った、愛国者としてのチャベックを物語る一文を最後に引用しよう。

……わたしが見た中で一番よい景色があるのはイタリアです。気がついた中で一番よい生活をしているのはフランスです。会った中で一番よい人たちがいるのはイギリスです。しかし、わたしが生きていけるのは、自分の国の中だけなのです。<sup>(32)</sup>

今、かれはプラハ南郊ピシェフラトの墓地に眠り、東ボヘミアの山裾の町マレー・スパトニョビツェのチャベック兄弟博物館、プラハ郊外ストルシュのチャベック記念館には、多くの遺品が納められて、かれの面影をしのばせている。

〔註〕

- (1) この作家については、栗栖継氏をはじめ多くの先学による紹介があるが、特にすぐれた紹介・研究書として、千野栄一：『ポケットのなかのチャベック』晶文社 1975 をあげたい。同書は、ポケットがいくつあってもしまい切れないチャベックの姿を、詳細にかつ巧みに描いている。なお、同書 189 ページ以下に、「イギリスからの手紙」という章がある。
- (2) この英訳は、日本でもかなり読まれているらしい。なお、その一部を英語教科書風に編集したものが、岡本圭次郎註解・Karel Čapek : *Letters From England* (イギリス通信) 成美堂となって出版されている。以下、本註では *AL* と略す。引用ページ番号は、第 27 版 (1970 年版) のもの。
- (3) 略歴によると、プラハのカレル大学でイギリス学とチェコ学を専攻後、ロンドン大学スラブ学研究所で助教授としてチェコ学を担当(1922—28)、同時に英米文学を研究し、さらに帰国後プラチスラバのコムンスキー大学の英語・英文学教授として、同学イギリス学科の創設に努力(1933—38)し、1939 年にはカレル大学哲学部に招かれた。ナチス占領下では、1942 年から 1945 年まで強制収容所生活を送らなければならなかったが、解放後は又大学に戻り講義を続けた。著書には『20 世紀英文学』(1932, 1947)、『アメリカ現代文学』(1934) などがあり、チャベックと共に、英米文学双書の編集にあたった。戦後関係を持ったケンブリッジ大学からは、MA の名誉学位を贈られている。
- (4) 『朝日新聞』1976 年 2 月 7 日付夕刊「海外文化」欄に本書の紹介記事がある。以下、本註では *ALK* と略す。
- (5) この人物の詳細については残念ながら不明。
- (6) やはりチェコ文学を代表する作家のひとりで、歴史小説を多く書いている。『チェコの古伝説』(1894)、『犬頭旗の一族』(1886) など。
- (7) ボチャドロによれば、ジプシーの血を引くことを誇りにしていたという。チャベックは女史と非常に親密になって、「おっかさん」とでも訳すべき呼び方をしたらしい。

- (8) 『人民新聞』と訳す方がよいのかも知れないが、日本語の「人民」には、いささかイデオロギー的な要素が含まれるので、「国民」を選んだ。
- (9) チャペックが仕事熱心だったことを示すのには、当時存命だったトマス・ハーディー (Thomas Hardy 1840—1928) のネクロログを手廻しよく依頼していたという事実がある。
- (10) いわゆるプラハ言語学派の中心人物で、機能言語学を主唱した有名な言語学者。カレル大学の教授として多くの優秀な弟子を育てた。チャペックもその講義を受けたひとりである。
- (11) チャペック自身はトラベログ (travelogue) と呼んでいた。
- (12) フランス語 *feuilleton* から。ジャンルの一種として認められている。
- (13) *AL* p.11.
- (14) *AL* p.11.
- (15) カレル・チャペック『オルガへの手紙』(*Listy Olze*) プラハ, 1971, p. 169. *ALK* p.87. 参照。
- (16) *The Daily Chronicle* June 4. 1924, *ALK* p.94. 参照。
- (17) *ALK* pp.88—9.
- (18) *AL* p.23.
- (19) *AL* p.49.
- (20) 人口の 70 パーセント以上がカトリックであるボヘミア育ちのかれは、当然プロテスタントには敵意を持ったのであろう。かれの生家の目と鼻の先にも、小さなカトリック教会がある。かれの作品に流れる宗教的情感は、あきらかにカトリック的である。
- (21) *AL* pp.71—2.
- (22) *AL* pp.44—5.
- (23) *AL* pp.63—4.
- (24) *AL* p.156.
- (25) *ALK* p.277.
- (26) *ALK* p.106.

- ⑳ *AL* pp.64—5.
- ㉑ *AL* pp.145—6.
- ㉒ *AL* pp.146—8.
- ㉓ *ALK* p.24.
- ㉔ *AL* p.46. ゲッツ (František Götze 1894— ) 演劇学者。ザークレイス (František Zákrejs 1839—1907) 演劇批評家。シュラーメク (Fráňa Šrámek 1877—1952) 詩人, チャベックと交友があった。シュミロフスキー (Alois Voitech Šmilovský 1837—1883) 作家。ラードル (Emanuel Rádl 1873—1942) 哲学者。ハッタラ (Martin Hattala 1821—1903) 言語学者, カレル大学教授。
- ㉕ B.B.C.放送用の演説。 *AL* pp.170—71.